

印刷メディアとスポーツ報道 「九州一周駅伝」の物語分析 山本 教人(九州大学)

1. 物語のはじまり

「九州一周駅伝」とは？

長崎市の平和公園をスタートし、反時計回りに九州を一周して福岡市の西日新聞社前のゴールを目指すこの大会は、全行程千キロ以上という距離においても、七十二区間を十日間かけて走破するという日数においても、現在行われている駅伝では最も大規模な大会となっている。

メディア・イベント、そして物語としての駅伝

吉見は、メディア・イベントの概念を、次のような三層が重層するものとしてとらえている。

- ：企業としてのマス・メディアによって企画され、演出されるイベント
- ：マス・メディアによって中継され、報道されるイベント
- ：メディア・イベントとは、メディアによってイベント化された出来事をさすことがある

駅伝大会の多くは、新聞社が時には競い合いながら主催し、演出してきたイベントであり、開催や演出を手がけた当の新聞社によって広く報道されてきたイベントである。つまり、 の意味でメディア・イベントである。

しかし、メディア・イベントとしての駅伝にとって決定的に重要なメディアの役割は、駅伝を物語ることにある。メディアは、駅伝のもつ複雑さやわかりにくさを、出来事の一部を切り取ってることによって、あるいは隠すことによって解消する。しかも、切り取られてきた出来事は、「郷土愛」や「努力の大切さ」、「伝統」などといったなじみのテーマのもとに「意味ある何か」として再配置され、読み手に提供される。このような選択と隠蔽、出来事の再配置を通じて駅伝は、それが何であるのかはじめて理解され、多くの人々から支持を得ることが可能となる。この意味で、駅伝は、メディア・イベントとしてのスポーツ、すなわちメディア・スポーツとよぶのが最もふさわしいようなスポーツなのである。つまり、 の意味でメディア・イベント。

以下では、「九州一周駅伝」の第一回大会から第五十回大会までを報じた西日本新聞の記事をテキストに、新聞が、どのようなやり方で駅伝を社会的に意味ある出来事として物語ってきたのかについて検討していくことにする。

「郷土愛」と駅伝

昭和二十七年十一月二十五日の夕刊に、選手と一緒に走って走る数人の子どもたちの写真が掲載されている。写真には、「宗太郎峠 峠三里はもう一息、兄ちゃん頑張ればくらがついてる(大分県宗太郎峠、走者は大分県選手)」という説明が添えられている。この写真を撮った当時の写真部次長山口真一郎は、「沿道の観衆と一体となるような、そういう駅伝をとらえたいと思っていた」(金子厚男、前掲書、二五〇頁)と述懐している。たしかに、九州一周駅伝がはじまったばかりの頃、駅伝の新聞報道には、それを「郷土愛」と関わらせて語る傾向が強く認められる。たとえば、第四回大会の開かれた昭和三十年十一月二十三日の朝刊には、次のような記述がある。

電車も臨時停車 悲鳴あげのお巡りさん

とにかくどの県へいってもファンの声援は大変なもの。はじめてみるものならトタンに駅伝性ノイローゼで気絶するほどの興奮のウズだ。...瀬高町ではお巡りさんがいくらピーピーと笛をならし、どなっても人の波は怒濤のように選手のコースを押しつぶし、まったく悲鳴をあげたお巡りさんいわく「もう私達の手におえまっせんバイ。選手バみるひまもなかです」とこぼしていた。

このほかにも、電信柱によじ登って応援したり、建設中のビルの足場に鈴なりになって応援したりする観衆の様子を伝える記事や写真を多く目にすることができる。現在のわたしたちの感覚からすれば、無秩序で、いかにも前時代的な危険きわまりないこのような光景も、それが観衆の郷土愛の発露である限り非難や危険視の対象とはならず、むしろ肯定的に評価されている。

だが、まもなくこうした牧歌的な風情の応援スタイルは禁止の対象となる。第五回大会の開催された昭和三十一年

十一月二十四日、新聞の「市内版」につきのような注意がはじめて掲載される。

沿道の応援にご注意

県教委では二十四日九州一周駅伝が本県を通過するので、沿道の応援などについてつぎのように県民一般に要望している。

- 一、応援は歩道からすること。道路が狭い場合、片側に整列すること。
- 一、選手はカーブでは最短距離を走るので、カーブの内側にならぬこと。また応援旗が選手の身体に触れぬよう。（小旗が選手の目に入った例がある）
- 一、とくに中継所では伴走車、群衆で相当の混雑が予想されるので、必ず定められた地点から出ないよう係員や警察の指示に従うこと。
- 一、地方の熱心な雄志が自転車、オートバイなどで伴走応援するものがあるが、これは大会規程違反はもとより、定められた監督伴走車の迷惑になるのでやめること。
- 一、観衆のなかから突然犬が飛び出して選手にかみつ়場合が多く困るので、駅伝通過の時刻には必ず飼犬をつないでおくこと。子供も飛び出さないように手をつないでいてください。

かつては郷土愛の象徴であった応援スタイルに対する新聞の評価は、これを境に反転することとなる。

2. 啓蒙的、教育的言説のなかの駅伝

「観衆」の誕生

先の「注意」が紙上に登場したわずか二年後の昭和三十三年十一月二十四日、宮崎県延岡市民の応援態度をたたえつぎのような記事が掲載される。

…両側に整然とならんだ市民たちの間から心からの拍手が起る。走者はそれがどこのチームであろうとやっと帰ってきたのだ。この駅伝王国に……。ほんとうにそんな思いがしみじみと胸を打つ。延岡のあまりにも見事な歓迎風景だ。よそに比べて一しおその思いに打たれる。洗練された市民の態度だ。

また、レース進行の妨げとならないように犬をつないでおくことを近所をお願いをして回る男性や、ホコリが選手を苦しめないよう未舗装の道路に水を打つ地元市民、最後の選手が通過するまで応援するのを忘れない観衆の態度を賞賛する記事を目にすることもできる。節度をわきまえ、協力と連帯の精神を備えた新しい種類の駅伝観衆がここに誕生したのだ。

近代化のなかで

九州一周駅伝の新聞報道は、つぎに示すように、九州各県の道路事情をきわめてわかりやすく読者に伝えてきたのでもあった。

九州のチベット日向路は“ゴビの砂漠、ならぬ“ゴミの砂漠、。おまけに風は太平洋からまともに吹きつける向かい風。情容しゃない砂ボコリには選手もコースのみきわめがつかぬほど（『西日本新聞』、昭和三十一年十一月二十二日）

このような記事は、道路の整備をひとつの政治的な課題として人々に認識させる働きをしたことであろう。その意味では、九州各県の道路の充実は、一部九州一周駅伝に負うところがあったといえるかもしれないのだ。

ところが、逆説的だが、道路の充実はまもなく駅伝開催にとって大きな危機を呼び込むことになる。昭和四十年代にはいと、車やオートバイ、自転車の急増に伴う交通難が、深刻な社会問題となりはじめるからである。この時、西日本新聞社は紙上において、つぎに示すように、時には教訓を垂れるような、そして時には教育的な論調で駅伝擁護の論陣を張る。

…駅伝はチームプレーである。総合力の勝負である。選手はチームという機械の小さな歯車である。…歯車は全体のために生かされ、自分も生きる。この使命感はすべての人生、職場にも通ずるものである（『西日本新聞』、昭和四

十四年十一月十四日)

ぼくらは「九州一周駅伝、地図をにらんで寒さに負けぬ体力づくり

...学校側でも『冬の体力づくりには、走るのが一番だと教えてくれたばかりでなく、自主的な学習態度が身につけてきた。...走ることを忘れはじめた現代っ子にたちに走ることの重要さを、あらためて教えている』(西田俊孝教頭)と評価している(『西日本新聞』、昭和四十五年十一月二十日)

また、交通事情の悪化のなかで、あえて駅伝を開催し続けることの意味を、社会の近代化に対する批判や反省という観点からつぎのように説明したりもする。

...限度に近づいたにしても、まだまだ九州は駅伝がやれる道路事情にあるのではないか。このことを積極的に再評価し、環境指標の一つにしてもよいのだとも考える。...人間が道路わきさえ走れぬような「道」とは何かに目を向ける絶好の機会ともしたい(『西日本新聞』、昭和四十八年十一月八日)

九州一周駅伝はこの時期、ひとつの大きな危機に直面していたことはまちがいない。だが、駅伝にとって大きな追い風となるような時代がまもなく訪れることになる。そう、健康の時代、そしてジョギングブームの時代である。

健康とジョギングブームの到来

昭和五十年代にはいと、「走る」という行為は、「健康」というキーワードとともに市民社会に広く、そして深く浸透していく。各地で「走ろう会」が設立され、様々な「市民マラソン大会」が開催されはじめる。新聞紙面には、「ルームランナー」や「ぶら下がり健康器」といった健康関連商品の広告が登場し、健康のためにジョギングやスポーツの実施を勧める記事を目にするようになる。

ところが、面白いことにこの時代、駅伝はしばしば健康やジョギングに対立するような位置づけを与えられ報じられている。たとえば、「駅伝は、男の根性が燃え上がる場だった」(『西日本新聞』、昭和五十四年十一月二日)というように、この時代の駅伝記事には「根性」という言葉が多用されている。また、十二年ぶりに九州一周駅伝に振り返ったランナーを、「ランナー魂 消えず 健康走じゃ物足りん」(『西日本新聞』、昭和五十七年十一月十三日)という見出しで紹介している。さらに、日本マラソンの父とうたわれ、九州一周駅伝育ての親の一人であった金栗四三が亡くなった昭和五十八年十一月十五日の社説には、つぎのような文章を見ることができる。

...マラソンに目立つのはカラフルなスポーツ着など華やかなファッション性だ。マラソンを楽しむのは結構だが意志力や体力を強化するスポーツ性が薄れては本末転倒にならないか。

ジョギングがいかに爆発的なブームとなろうと、それは九州一周駅伝が社会的に意味のあるイベントであることを示す証にはなり得ない。なぜなら、駅伝はジョギングではないし、選手は自分や他人の健康のために走っているわけではないからだ。したがって、健康の時代、ジョギングブームの時代にあっても、九州一周駅伝は別様の語り口で擁護されなければならなかった。このとき新聞社は、健康やジョギングブームに代表される近代的なライフスタイルに対立するものとして駅伝を位置づけ、その時代的な意味や意義を論じようとしていたのではないだろうか。

3. 「大きな物語」の喪失

スポーツとしての駅伝

激動の昭和から平成へという大きな時代の移り変わりとともに、九州一周駅伝の新聞報道からこれまでに検討してきたような駅伝擁護の論調は次第に影をひそめていくことになる。つぎの記事は、このことを最もよく示している

駅伝の面白さはまず、チームワークの競走であることだろう。個人レースのマラソンは苦しければ途中棄権も出来る。しかし駅伝は、チームを思えば苦しくても息は抜けない。...

もう一つの面白さは、作戦が勝敗のカギを握ることだ。...戦術の競走でもある。

九州一周駅伝が特異なのは、その面白さが十日間続くことだ。郷土の榮譽を担って力走する各県チームがどんな接戦を演じるか、興味は日ごとに増す。日程や距離だけでなく、面白さも「世界一、」ということになる(『西日本新聞』

平成元年十一月二日)

この記事が伝えようとしていることは、九州一周駅伝は、それ自体が多様な楽しみを秘めた独特のスポーツであるということであり、苦しみに耐える選手を見ることさえそうした楽しみのひとつであるということである。ここには、教訓めいた、あるいは説教を垂れるような記述を何ら認めることができない。「なぜ走るのか」など問うたり、説明したりする必要はなくなったのである。このような書き方が可能となったのは、健康やジョギングブームのなかで、多くの人々がスポーツとしての走、あるいは駅伝固有の面白さに気づいていったということがあったにちがいない。この意味では、健康やジョギングブームは、駅伝にとってはやはり大きな追い風となるブームであったのだ。

「月に向かって走れ」

九州一周駅伝の新聞報道は、これまで、近代社会が引き起こした様々な人間疎外的な状況に対し、駅伝を通して批判を加えるという極めて重要な主張をしてきたのもであった。だが、こうした近代対反近代(駅伝)という対立は徐々に解消され、近代社会批判の観点から駅伝を擁護するような記事は消えていく。「月に向かって走れ」という九州一周駅伝のスローガンは、このことを確認するのにおそらく最も適した題材となる。

九州一周駅伝が月面に到着し、スローガンが達成された平成七年十月二十六日、新聞はこの出来事をつぎのように報じている。

月旅行船アポロ11号のアームストロング船長は、月面に第一歩を踏みしめたとき「この一歩は小さいが、人類にとっては偉大な躍進だ」と言った。九州の大地に刻まれた九州一周駅伝の小さな一歩の集積も、汗と力の偉大な結晶である。

この記事に見られるように、「月に向かって走れ」というスローガンは、科学技術が人類に可能とした経験を頼りにするものであり、「近代化」と「人間の自然な力」とを対比させつつ両者を称揚するような効果をもたらしているといえる。九州一周駅伝は、社会批判のよりどころではなく、楽しめるためのスポーツに変容したのである。

勝負の物語

駅伝が競争である以上、どのチームがどのようなやり方で勝利を手にしたのか、あるいは、誰と誰がどのような競り合いを展開したのかなどといった「勝負の物語」は、九州一周駅伝のはじまりから駅伝記事の中心的なテーマであった。だが、今日のように、駅伝がそれ固有の面白さから多くの人々の関心を集め、見られるようになってくると、勝負をどのように物語るかは、これまで以上に重要となってくる。勝負の面白さこそが駅伝の価値だからである。このような観点から駅伝記事を検討してみると、確かに今日の勝負の物語には、過去にはなかったような特徴を認めることができる。

：個人情報を中心にして記事が書かれている

誰がどのような活躍をしたのかが、これまでの当該選手の活躍と関連づけながら記述され、駅伝ファンにしか意味のないような詳細な情報(出身県、出身校、家族構成、身長、体重、血液型、性格や趣味など)がそれに添えられる。また、チームの成績がある個人の活躍に還元されて説明される。このような個人情報を中心とした記事の構成は、駅伝ヒーローやスター選手を生み出すことになるが、今日の駅伝ファンは、彼らについての情報をより多く手に入れることに「読みの快樂」を見出しているのかもしれない。

：勝負の記事であるにもかかわらず、そこからは敗者が注意深く排除されている

「後ろがきているぞ。抜かれるな」。4区の後半、山口・金川真治(カネボウ)に観察車から思わず声が出た。あごは上がり、腕の振りも鈍い。...

金川は未だ高校時代のベストタイムを更新できていない。「まず決められた練習メニューを確実にこなし、自分の殻を破りたい」。悔しさを糧に飛躍のきっかけをつかもうとしている(『西日本新聞』、平成十三年十一月十日)。

九州一周駅伝の勝負の物語においては、失敗は、将来における成功のひとつの条件として位置づけられている。確かに、将来の成功は約束されたものではないとしても、それを人生の長さ分先送りすることは可能なのである。結局、この物語には終わりが無いのだ。

4. おわりに テキストの構造と能動的な読み

新聞は当初、九州一周駅伝を「郷土愛」の象徴として位置づけ、報じていた。だが間もなく、社会の近代化のなかで九州一周駅伝の開催が危機に直面すると、新聞の駅伝報道は、選手と渾然一体となった観衆の応援スタイルを郷土愛の発露として礼賛する語りを放棄せざるを得なくなり、代わりに、近代的な社会生活のなかで駅伝のもつ啓蒙的、教育的な意義を強調しはじめた。そして、健康やジョギングブームをきっかけとし、走ることや駅伝という競技の面白さが広く理解されるようになってくると、九州一周駅伝を報じる新聞の紙面からは、駅伝の社会的意味をくどくどと説明するような記事が消えていった。今日の駅伝記事は、駅伝マニアを喜ばせるような駅伝ヒーローやスター選手たちの情報であふれている。いまや駅伝は、「大きな物語」を背景とすることなく、それ固有の面白さから社会的な存在価値が認められるようになったということであろう。

ところで、スポーツについてのメディア・メッセージの内容分析はこれまでに、スポーツ報道においては、「ナショナリズム」や「ジェンダー」、「人種」、「成功」、「競争的個人主義」、「チームワーク」、「暴力」、「消費主義」などが主要なテーマとなっていることを確認し、そのイデオロギー性を告発してきた。

本稿は、メディア・メッセージのイデオロギー性について検討することを主要な目的としてきたわけではないが、九州一周駅伝を報じた新聞記事にも、先ほど示したテーマのいくつかを確認することが可能である。たとえば、選手の活躍を「内助の功」という伝統的な性別役割の観点から報じる記事は、その好例である。だが、「働く女性たち」を紹介した記事や、「アクティブな女性」をテーマとする記事を別のところに認めることもまた可能なのである。つまり、女性を取り上げた記事のすべてが、ある政治的な主張によって貫かれているということでは決してないのだ。重要なのは、伝統的な女性らしさのイメージに対立するような、あるいは少なくともそれを弱めるような記述もまた、駅伝記事には認められるということである。

こうした記事が示しているように、また、「勝負の物語」がそうであったように、今日の新聞の駅伝記事は、主張を明確に表明せず、結論を曖昧にするような書き方で構成されているように見える。このような記事の有する曖昧さは、今日の駅伝記事が個人情報を中心に構成されているということとともに、多様な解釈を読み手にもたらすことになるだろう。そうだとすれば、読者の「能動的な読み」とは、実はテキストの構造自体が可能とするものであると考えることができる。近年、必ずしも評判が芳しいとはいえないメディア・メッセージの内容分析の意義を、このような観点から最後に主張しておきたい。

参考文献

- 1) 江原由美子『「受け手」の解釈作業とマス・メディアの影響力』『新聞学評論』三十七、一九八八年、五十一—六十五頁
- 2) G・ヴィガレロ「ツール・ド・フランス」『思想』第九一一号、岩波書店、二〇〇〇年、八六—一一八頁
- 3) K. Kinkema and J. Harris, Sport and the Mass Media, Exercise and Sport Science Reviews, 1992, pp.127-159.
- 4) 奥 武則『大衆新聞と国民国家 人気投票・慈善・スキャンダル』、平凡社、二〇〇〇年
- 5) 吉見俊哉「メディア・イベント概念の諸相」津金澤聰廣『近代日本のメディア・イベント』、同文館、一九九六年、四—五頁